

本年5月、東海心理学会第32回大会で報告した折の反響をふまえて、今後この方面での一層の検討を深めたいと考える。

7) これらの方向性とは視点を異にするものではあるが、昨年12月、Bears博士を招いての名古屋地区における講演会の成功をも忘れがたい。Bijou博士の流れを汲む行動分析の立場からの精神薄弱児に対する治療効果を追求しようとする熱意は、その講演会に参集した人びとの心を強くうった。この集いに直接の責任をになったものとしての喜びであるが、今年8月、小嶋助教授の努力によって開かれたBronfenbrenner教授のセミナーに参加して、これまた立場は違うものの、私どもの仕事に理解をいただいたひとりとして、今後も色々な面から国際交流の道をも大切にしていこうつもりである。

8) 学生相談領域では、昨年また名古屋大学学生相談

室で主宰した学生を対象とする「自己発見グループ」をふたたび、秋色深い蓼科高原でもち得たことは、改めて印象よみがえるものがある。若いということのすばらしさをこのときしみじみ実感する。そしてまたこの若さにつきあって30数年、京都大学学生懇話室で終始カウンセラーとしての職能を果たし、この4月退官された石井完一郎教授の講演の機会に、司会者としての役割をにないつつ、その真情にうたれた思いを忘れがたい。この1月、広島大学における第16回全国学生相談研究会議の席上でのことである。カウンセリング・マインドをこのときほどこきびしくまた感じさせられたこともない。これらをまた契機に、共感的理解の線に沿って、いよいよ人間への内面的接近の意義と方法を模索していきたいと考える。

(昭和58年9月5日)

## 研究経過報告——昭和57年度

田 畑 治

1. カウンセリング過程の研究。この領域では、近年カウンセリング過程で特に手がけてきているフォーカシングを抑うつ神経症青年(男子)に適用した事例を発表することができた(「フォーカシングの事例検討」第1回フォーカシング研究会、京都東山閣、57年7月)。またフォーカシング技法の生みの親であるジェンドリン博士の入門書の翻訳の書評をする機会を得た(ユージン・T・ジェンドリン著、村山正治・都留春夫・村瀬孝雄共訳「フォーカシング」福村出版刊の書評、季刊精神療法第9巻第1号、90—91頁、58年1月)。

2. 心理臨床家の養成、教育・訓練問題について。

まず学部学生段階での実習・演習の一つのモデルとして、筆者の過去20年間の経験を基礎として、単著でテキストを出版することができた(『カウンセリング実習入門』新曜社、57年6月)。本書の基本を貫く考え方は、人間の精神的生命をいかに育み、成長するよう援助するかということである。そのために学部学生段階で最低限身につけるには何をなすべきかを明らかにしたことである。幸い、各方面から好評を得ているようである。

もう一つ特記すべきは、4年前から始めた心理臨床家の集い、そしてこれを承けての心理臨床全国研究集会が、

さらに日本心理臨床学会として発足し(昭和57年3月)、第1回大会が九州大学で開催され成功裡に終了したことである(昭和57年10月)。またこの年度内に役員選挙も行われ、本学の村上英治教授と共に理事に選出され、この学会のかかげた所期の目的を果すべき重責を荷担うこととなった。山積した課題のうち、教育・訓練問題、職能・資格問題、倫理問題、実践研究推進の問題等が当面の緊急課題である。

この学会の特色である症例検討においてコメンテーターの役割をとる経験は、これが公開の場で行われるため、とても貴重な自己研修になる。この年度は、2つの機会を得ることができた(岸田博氏他「来談者中心カウンセリングに於ける基礎的考察」、第1回ヒューマニスティック心理学研究会、京都女子大、57年7月；藤澤敏幸氏「ある思春期強迫神経症患者との6年間」日心臨第1回大会、九大、57年10月)。

3. 臨床青年心理学への接近。過去6年間、共同研究として池田博和助手らとともに取り組んできた。今年は、「青年期治療の内的視点」として、青年期治療に際して各メンバーがどのように考え、かつ取り組んでいるか、治療者の内側を浮き彫りにした(研究紀要第29巻、57年

12月)。なおこの共同研究に、この年度から女性メンバー（院生他）が増えてきた。今後、女性治療者の特質をも検討しながら、更に共同研究を発展させたいと考えている。当面は、臨床ケース検討を定期的に行っていくことが必要である。またその成果を書物にしたいと考えている。

また、学部全体で共同研究として取り組んできた“教育'60年代研究”にも、われわれは参画し、臨床的知見を加えることができた（「臨床場面で接した現代青年の内面的構造」三枝孝弘・田畑治編『現代の児童観と教育』Ⅲ部3章、福村出版、57年6月、274-298頁所収）。

4. グループ・アプローチ、エンカウンター・グループの実践研究。

本学学生相談室主催の第6回自己発見のための合宿セミナーが開かれ、今回もファシリテーターとして参加した（「懐しの蓼科でのグループ合宿」昭和57年度厚生補導特別企画、名大学生相談室発行、58年3月、17-30頁所収）。学生の集中的グループ経験の意義は、大学在籍期間中という限られた年限内に、如何に対人関係をみつめなおし、かつ自己再発見をなすうかにある。この

年のグループでは、同一学部からの“顔見知り”の仲間が多い場合にどのようなことが起りうるかについて、貴重な体験ができた。今後、民間でのグループ、オープン・エンカウンター・グループ、ウィーク・エンド形式のものなどとの比較・検討をすることが残されている。データとしてのメモ記録はあるが、まだ醸成中である。

5. 特定研究「わが国における人間関係の比較的・総合的研究」では、教育臨床班は、さまざまな条件のために開店休業の状態であった。

6. その他の活動など。

「親と子をめぐむ問題——大学の教育臨床の立場から——」東海心理学会第31回大会シンポジウム発題、57年5月、名城大学教職課程部、抄録集69頁。

「おちこぼれ——心理臨床の立場から——」日本心理学会第46回大会シンポジウム発題、57年7月、京都大学、S16頁。

「子どもの“よさ”を知ることと“はげまし方”」児童心理、12月号（36巻13号）、40-47頁、57年12月。

（昭和58年8月31日記）

## 昭和57年度研究経過報告

若 林 満

### 1. 研究活動と学会報告

現在当研究室を中心に以下7つのプロジェクトが進行中である。第1は昨年度からの継続の、女子短大生の職業自己像と職業選択に関する研究で、本年度は後藤宗理・鹿内啓子先生と協同で、職業レディネス・自己能力評価・職業志向などの新しい尺度を開発し、女子大生における自己概念と職業意識の関係が調べられた。この研究の成果は本年度の日本心理学会および東海心理学会において発表された。第2に上記研究の延長として、「キャリア発達研究会」が中心となって、主に男子大学生を中心に職業意識の研究が進行中である。東海4県の主要国立大学へ昭和58年度に入学した大学生約2,500名から質問紙によるデータが収集され、目下分析中である。このプロジェクトは、本年度名古屋大学教育学部に入学した新入生の、学生生活をつうじての職業意識の変化と職業選択過程を、縦断的に研究することを本来の目的として

いる。第3に、やはり昨年度からの継続で、富安玲子・湯川隆子先生や職場の代表委員との協力のもとで、愛知県婦人労働サービスセンターの委嘱を受け、民間企業における女子労働力の育成と活用に関する調査研究が行われた。研究結果は日本心理学会と愛知県産業労働懇話会において発表された。第4に、以前行われた「わが国産業組織における大卒新入社員のキャリア形成に関する研究」のfollow-upが試みられた。分析の結果、本人の潜在能力と入社3年目までの組織での経験（特に上司との垂直的交換関係）が、入社7年後のキャリア結果（昇進・給与・能力評価など）を強く規定していることが見出された。この研究の結果は本年度の組織学会およびThe Second Japan-US Business Conferenceで発表された。

第5に目下データ取得中の研究として、アイオワ大学のD. Gallagher教授との、働く人びとの組織忠誠心